

訂正

和歌山県 資料提供

令和7年1月24日

## 「農林水産関係試験研究機関の研究成果を発表 します」の訂正について

令和7年1月23日付けで資料提供を行いました「農林水産関係試験研究機関の研究成果を発表します」について、下記（別紙）のとおり訂正いたします。

### 記

「果樹試験場うめ研究所成果発表課題 要約」2ページ目のタイトル及び内容

#### 【誤】

#### 6. 日高地方における「南高」カットバック処理+摘心処理による

#### 低樹高・安定生産への取組及びクビアカツヤカミキリ対策について

（日高振興局農林水産振興部 主任 行森啓）

・うめ研究所で開発されたカットバック処理+摘心処理による低樹高・安定生産技術は「南高」青梅の効率的な栽培方法として有望な技術であり、令和3年度から現地実証園を設置し、現地試験や処理の講習会を実施し、技術普及に取り組んでいる。

・日高地方におけるクビアカツヤカミキリ被害は令和5年5月の初発以降、1市3町で発生し拡大傾向である。発生地域の悉皆調査、管内全域の定点調査の実施により被害を把握し、発見時の通報及び園地を守るための取組について啓発を実施している。



#### 【正】

#### 6. 日高地方における「南高」カットバック処理+摘心処理による

#### 低樹高・安定生産への取組について

（日高振興局農林水産振興部 主任 行森啓）

うめ研究所で開発されたカットバック処理+摘心処理による低樹高・安定生産技術は「南高」青梅の効率的な栽培方法として有望な技術であり、令和3年度から現地実証園を設置し、現地試験や処理の講習会を実施し、技術普及に取り組んでいる。

#### （連絡先）

農林水産部 農林水産政策局 研究推進課 企画班  
担当：的場 電話：073-441-2995 内線：2995

## 6. 日高地方における「南高」カットバック処理+摘心処理による

### 低樹高・安定生産への取組及びクビアカツヤカミキリ対策について低樹高・安定生産への取組について

(日高振興局農林水産振興部 主任 行森啓)

- うめ研究所で開発されたカットバック処理+摘心処理による低樹高・安定生産技術は「南高」青梅の効率的な栽培方法として有望な技術であり、令和3年度から現地実証園を設置し、現地試験や処理の講習会を実施し、技術普及に取り組んでいる。
- ~~日高地方におけるクビアカツヤカミキリ被害は令和5年5月の初発以降、1市3町で発生し拡大傾向である。発生地域の悉皆調査、管内全域の定点調査の実施により被害を把握し、発見時の通報及び園地を守るための取組について啓発を実施している。~~

和歌山県 資料提供

令和7年1月23日

# 農林水産関係 試験研究機関の研究成果を発表します

農林水産業競争力アップ技術開発事業などで取り組んだ試験研究の成果について、広く県民の皆様にご覧いただくため、成果発表会を開催するとともに動画配信いたします。

## 《 開催スケジュール 》

試験研究機関	日時	会場開催			動画配信 申込期限
		会場	定員	申込期限	
林業試験場 TEL：0739-47-2468	2月14日(金) 13:30~16:00	上富田文化会館 2階小ホール (西牟婁郡上富田町朝来 758-1)	100名	2月7日(金)	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; display: inline-block;">視聴申込期限</div> 2月21日(金)  <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; display: inline-block;">配信期間</div> 2月28日(金) ~ 3月28日(金)
水産試験場 TEL：0735-62-0940	2月14日(金) 13:30~16:00	水産試験場 2階学習ホール (東牟婁郡串本町串本 1557-20)	62名	2月7日(金)	
果樹試験場 TEL：0737-52-4320	2月19日(水) 10:10~12:00 13:30~15:20 (同内容2回開催)	果樹試験場 大会議室 (有田郡有田川町奥 751-1)	各80名	事前申込不要	
果樹試験場かき・もも研究所 TEL：0736-73-2274	2月21日(金) 13:30~16:00	那賀振興局 3階大会議室 (岩出市高塚 209)	50名	2月17日(月)	
農業試験場 農業試験場暖地園芸センター TEL：0738-23-4005	2月26日(水) 13:00~15:20	農業試験場暖地園芸センター 研修館 (御坊市塩屋町南塩屋 724)	50名	2月19日(水)	
果樹試験場うめ研究所 TEL：0739-74-3780	2月27日(木) 13:30~16:00	グランドメルキュール和歌山みなべ (日高郡みなべ町山内 字大目津泊り 348)	160名	事前申込不要	
畜産試験場 畜産試験場養鶏研究所 TEL：0739-55-2430	(動画配信のみ)				

## 《 お申し込み方法 》

参加・視聴を希望する試験研究機関の申込用紙により、会場ごとにお申し込みください。

## 《 動画配信の視聴方法 》

動画共有サービス「YouTube」にて2月28日(金)~3月28日(金)の期間配信します。申込みいただいた方に後日、動画を視聴できるURLをお送りします。

発表要旨は、県ホームページからダウンロードできます。  
また、各試験研究機関でも配布します。

[https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070100/070109/004\\_happyo.html](https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070100/070109/004_happyo.html)



(連絡先)

農林水産部 農林水産政策局 研究推進課 企画班  
担当：的場 電話：073-441-2995 内線：2995

# 林業試験場成果発表課題 要約

## 1. 遺伝分析によるクマノザクラの雑種判定技術

(研究員 松久保康輔)

クマノザクラは新たな地域資源、観光資源として期待されている。しかし、雑種苗が普及すると、クマノザクラの生存が脅かされる恐れがある。雑種苗を除くためには若木段階での雑種の特徴を明らかにする必要がある。そこで遺伝分析による雑種個体の判定を行った。自生する5本のクマノザクラから採種した苗180本のうち8本が雑種個体と判定でき、簡便な雑種判定に寄与する知見を得られた。

## 2. 和歌山県下から収集したクマノザクラの開花・成長特性

(主査研究員 山下由美子)

クマノザクラの優良系統を選抜するため、優良と思われる候補木を収集・増殖し、同一地に植栽した後、開花状況を調査した。本県のクマノザクラには、開花時期が非常に早い個体、遅い個体、開花期間が長い個体、幼齢で着花数が多い個体があることが分かった。これらの情報は、特徴のあるクマノザクラの選抜に貢献するだけでなく、花色や開花時期といった多様な観賞ニーズに対応できることを示している。

## 3. 山土場等でヒノキ皮付き丸太に穿孔する害虫

(主任研究員 法眼利幸)

通年伐採の増加にともない、山土場等に集積された材に穿孔性害虫による被害が多発しているため、ヒノキ皮付き丸太に産卵する種と孔道の深さ等を調査した。6～10月に森林に1ヶ月置いた材にキイロホソナガクチキムシの幼虫が多くみられ、材の深いところまで穿孔していた。山土場では本種の産卵に注意する必要があると考えられた。

## 4. 県産スギ・ヒノキ原木の強度性能評価における簡易測定値の適合性

(研究員 栗田香名子)

簡易型強度測定器を用いた原木ヤング係数の測定を行い、①密度を一定としてメートル未満の材長を考慮せずに計算したヤング係数と、②実際の密度および材長を考慮して計算したヤング係数を比較したところ、簡易ヤング係数の方が安全側の低い数値となる傾向がみられた。この結果を活用することで、簡易な方法による原木の強度性能に応じた選別に寄与することが期待される

## 5. ヒサカキの新たな病害「枝葉枯れ症状」の防除技術について

(主任研究員 田中作治)

本県で有数の生産を誇る花木ヒサカキの新たな病害「枝葉枯れ症状」の、より効率的な防除方法として薬剤の散布期間延長と回数を削減した現地試験した結果、一部罹病枝葉から病害発生が見られた。また、これまでの試験研究結果を取りまとめた「枝葉枯れ症状」防除マニュアルを作成し、その中のヒサカキの手入れと薬剤散布による防除技術について報告する。

# 水産試験場成果発表課題 要約

## 1. 表層型浮魚礁におけるカツオ漁業の実態

(研究員 藤田朋季)

表層型浮魚礁（以下、浮魚礁）における漁業実態を、沿岸カツオ一本釣り漁船 6 隻への聞き取り調査によって明らかにした。カツオ漁獲量全体のうち浮魚礁の占める割合は、59.6%から 88.9%の間であった。このことから、浮魚礁周辺は沿岸カツオ一本釣り漁業にとって重要な漁場であることが明らかになった。また、カツオは主に 5 月から 11 月の水温約 20℃以上で浮魚礁に集まると考えられる。

## 2. 熊野灘南部海域における水温の経年変動

(主査研究員 御所豊穂)

熊野灘南部海域で毎月実施している海洋観測の水深別、季節別の水温について、1966～2023 年までの 58 年間の解析を行った。水温はいずれの水深、季節でも上昇傾向で、特に冬季の 0m, 30m, 50m でその傾向が強かった。春季、夏季は鉛直方向の混合が起こりにくく、秋季、冬季は 50～100m 付近まで混合されていることが明らかとなった。

## 3. アカモク藻場造成技術の開発

(副主査研究員 西條大輔)

アカモク藻場造成技術を開発するために人工種苗生産技術開発及び人工種苗の移植実証試験を行った。人工種苗の生産には、自然採卵での受精卵確保が効率的であり、硬質な基質で種苗の生残が良かった。移植は移植時期が遅いほど成長がよく、移植した次年度には移植第二世代の発生も確認でき、藻場造成に効果的であると考えられた。

## 4. 抗菌剤を使用しないアユ冷水病防除技術の開発 ～効果と普及性向上～

(主査研究員 堅田昌英)

抗菌剤を使用しないアユ冷水病防除技術の開発に向けて、経口ワクチン試験、浸漬ワクチン試験及びクエン酸ナトリウム投与試験を実施した。ワクチン試験では防除効果を示す再現性のある結果は得られなかったが、クエン酸ナトリウム投与試験では、配合飼料への添加量を 10%にして、長期間（3 ヶ月間）投与することで、冷水病の防除効果が認められた。

# 果樹試験場成果発表課題 要約

## 1. ウンシュウミカン‘あおさん’の貯蔵方法について

(主査研究員 宮井良介)

1月下旬に収穫した果実を無包装で貯蔵すると、貯蔵1ヶ月を過ぎた3月に果皮障害(しなび、ヘタ枯れ)が急激に増加したが、貯蔵環境の湿度を高く保持するタイバックを用いた包装や木箱内で貯蔵することで、果皮障害を軽減することが可能であった。

## 2. サンショウにおける摘心の影響と樹勢維持に向けた取り組み

(研究員 松本大)

ブドウサンショウにおいて、発育枝に対する夏期の摘心処理による翌年の着果および樹体への影響について調査したところ、無摘心に比べて翌年の結実性や樹勢が良くなる傾向がみられた。

## 3. ブドウザンショウの生態と増産に向けた取り組み

(和歌山県立有田中央高校 仲里長浩)

本研究は地域の高齢化対策と増産に向けた取り組みの一環として実施してきた内容である。今回紹介するのは、ミカン科のブドウザンショウが雌雄異株の果樹であるという異色の生態であることから、花の咲く時期や生産物の利用の可能性について話をまとめた。次に管理作業の軽減を見据えた防草シートの有効性を検証した。さらに、ブドウザンショウの接ぎ木技術の向上を目指した取り組みを紹介する。この接ぎ木のポイントは多くの果樹でも応用できるので紹介したい。

## 4. 立木とネットを利用した軽量のシカ捕獲用囲いワナの開発

(主任研究員 角川敬造)

立木と高強度ポリエチレン繊維ネットを用いた囲いワナを考案した。このワナは、防護柵の穴や隙間から侵入するシカの習性を利用したもので、ネット地際部からもぐり込ませて捕獲する。一般の金属製囲いワナと比べて軽量で運びやすく低コストなため、シカ捕獲ワナとして有効である。

## 5. ベフラン液剤25失効後のカンキツ貯蔵病害対策

(副主査研究員 直川幸生)

ベルコートフロアブルは2,000倍でベンレート水和剤と混用することで各剤の単用よりも緑かび病に対して高い効果を示した。また、ベンゾイミダゾール系薬剤(ベンレート水和剤、トップジンM水和剤)の耐性菌に対しても効果があり、ベフラン液剤25の代替薬剤として有望と考えられた。

# 果樹試験場かき・もも研究所成果発表課題 要約

## 1. ネット資材によるクビアカツヤカミキリの防除効果

---

(主査研究員 弘岡拓人)

モモの重要害虫クビアカツヤカミキリの防除技術として、異なる目合いと色彩のネット資材の産卵抑制効果を検証した。その結果、目合い 0.3mm の白ネットが供試資材中で最も有望な物理的防除資材と考えられた。

## 2. 「紀州てまり」のカキ灰色かび病の防除対策について

---

(主任研究員 大谷洋子)

カキ「紀州てまり」のカキ灰色かび病の果実発病に対して、フロンサイド SC またはフルーツセイバーの満開期散布は防除効果が認められ、開花直前と開花終期に 2 回散布すると開花直前の 1 回散布または満開期の 1 回散布より防除効果が優った。

## 3. カキ「中谷早生」果実の早期軟化抑制に有効な対策の検討

---

(副主査研究員 岡橋卓朗)

カキ「中谷早生」などの極早生品種で問題となっている早期軟化は、収穫後 3~5 日に発生する軟化であると考えられた。早期軟化抑制効果について、低透湿性段ボール処理は収穫時期によってばらつきがあり、1-MCP 処理は時期に関わらず安定的に抑制した。

## 1. ‘ししわかまる’の養分吸収特性に基づいた施肥技術の確立

(農業試験場環境部 主任研究員 橋本真穂)

‘ししわかまる’では、整枝栽培で窒素施用量を60kg/10a程度とし、緩効性肥料を用いて全量基肥施用、または有機質肥料を用いて基肥30kg+追肥30kg施用することで、収量や可販果率が向上し、‘葵ししとう’と同等の可販果収量が得られる。

## 2. トマト葉かび病の発生生態と防除

(農業試験場環境部 研究員 南方千景)

日高地域のミニトマト栽培施設において、定植期の資材消毒の実施や、栽培初期の9月~10月にかけてペンコゼブフロアブル、ダコニール1000、ベルコート水和剤を用いた3週間間隔の予防散布の実施が葉かび病の防除に有効であった。

## 3. 夏秋系スプレーギク新品種‘紀州サマーリンド’の特性

(農業試験場栽培部 研究員 井溪奏一朗)

夏秋ギク型スプレーギクの県オリジナル品種として‘紀州サマーリンド’を育成した。ピンク色のシングル咲き品種であり、消灯後12~13時間の日長条件とすることで安定して開花する。また、草姿の伸長は非常に良く、切り花の重量も既存の品種と同等以上であることから、高い秀品率が期待できる。

## 4. 高温耐性のあるスターチス有望系統の選抜方法の検討

(農業試験場暖地園芸センター 研究員 出口萌)

スターチスの脱春化の難易を簡易に比較する方法を開発するため、低温処理済みビトロ苗を鉢上げ後、30℃または35℃、5日または10日の条件で高温処理を行い、抽苔への影響を調査した。35℃10日の条件が最も影響が大きく、脱春化の難易を比較できると考えられた。また、この条件を用いて、県育成品種の脱春化の難易を調査した。

## 4. 冬季の実エンドウハウスにおける既存の設備を利用した制御方法がハウス内温湿度に及ぼす影響

(農業試験場暖地園芸センター 研究員 山野智輝)

ハウス実エンドウの品質不良莢、病害を抑制するため、既存の設備を利用した時の温湿度の推移を調査した。慣行管理では夜間高湿度になり、曇雨天日は日中のハウス内気温が生育適温以下になった。一方、側窓の開度を小さくして終日開放すると、曇天時でも日中の生育適温を確保し、終日高湿度条件を回避した。また、夜間の気温は全閉時と同等の推移を示した。

# 果樹試験場うめ研究所成果発表課題 要約

## 1. 「露茜」の片側一文字仕立てについて

(うめ研究所 研究員 向日春輔)

「露茜」の安定生産や作業性向上を目的に、主幹を一定の高さで水平に誘引し、苗木を育成する「片側一文字仕立て」を開発した。コンパクトな樹形のため植栽本数を増やすことにより、10a 当たり累積収量は従来の仕立て方である主幹形に比べて6年生までも多く推移した。剪定時間は主幹形より短くなり、収穫効率は主幹形と同等以上となった。

## 2. かん水量の違いが「南高」の果実肥大に及ぼす影響

(うめ研究所 研究員 金丸丈能)

ウメは、果実肥大期の水分ストレスにより果実肥大が抑制され、収量低下につながる。そこで、樹体が水分ストレスを受けず、収量が維持できる適切なかん水量を明らかにするため、ハウス内に植栽した「南高」に異なる量のかん水処理を行った結果、20mm 以上のかん水で果実肥大が促進されることが明らかとなった。

## 3. モモヒメヨコバイの発生生態と防除対策について

(うめ研究所 研究員 裏垣翔野)

近年、ウメ産地で葉への吸汁被害が問題となっているモモヒメヨコバイの発生生態を調査したところ、葉の寄生幼虫が増加した後に被害程度が高まる傾向があった。本種の登録薬剤4剤のほ場での防除効果を検討した結果、いずれも処理7日後までは高い効果があったが、処理14日以降は効果の低下が認められた。このことから被害の抑制には寄生幼虫が増加する前の薬剤処理が有効であり、薬剤処理後2週間程度が経過すると薬剤の防除効果が低下するので発生状況に注意が必要である。

## 4. 授粉用品種の開花予測プログラムの開発および暖冬がウメの開花期、萌芽期および収穫期に及ぼす影響

(うめ研究所 副主査研究員 柏本知晟)

授粉用品種の「小粒南高」、「NK14」、「白王」の開花始めおよび満開期を予測するプログラムを新たに開発した。暖冬により多くのウメ品種で開花期および収穫期が前進することが明らかとなった。一方で、開花期については台湾ウメで暖冬の影響は小さかった。また、萌芽期や満開期から収穫期までの積算温度については暖冬年と平年で差が小さかった。

## 5. 施肥量の異なる「南高」への開花前の高温が花器に及ぼす影響

(うめ研究所 研究員 綱木海成)

窒素施肥量の異なるウメ「南高」樹体を開花前に高温条件下におき、落葉後から開花期までの3つの加温期間(長期、短期、無加温)および樹体栄養が花器に与える影響を調査したところ、いずれの加温処理においても減肥区では花数が減少する傾向がみられた。このことから暖冬年においても十分な施肥を行うことでウメ生産量の減少を抑えられることが示唆された。

## 6. 日高地方における「南高」カットバック処理+摘心処理による 低樹高・安定生産への取組及びクビアカツヤカミキリ対策について

---

(日高振興局農林水産振興部 主任 行森啓)

- ・うめ研究所で開発されたカットバック処理+摘心処理による低樹高・安定生産技術は「南高」青梅の効率的な栽培方法として有望な技術であり、令和3年度から現地実証園を設置し、現地試験や処理の講習会を実施し、技術普及に取り組んでいる。
- ・日高地方におけるクビアカツヤカミキリ被害は令和5年5月の初発以降、1市3町で発生し拡大傾向である。発生地域の悉皆調査、管内全域の定点調査の実施により被害を把握し、発見時の通報及び園地を守るための取組について啓発を実施している。

# 畜産試験場、畜産試験場養鶏研究所成果発表会 発表課題 要約

## 1. 県内和牛繁殖農家における妊娠率等の算出および生産現場への適用

(畜産試験場大家畜部 主査研究員 高田広達)

16戸の農家を対象に令和5年度の授精率(発情発見率)、妊娠率および受胎率を算出した。授精率(発情発見率)×受胎率=妊娠率ではあるが、妊娠率の向上には授精率(発情発見率)を上げることのほうが受胎率を上げることよりも影響が大きいことを示した。また妊娠率の向上が分娩間隔の短縮につながる可能性があることを示した。これらの数値を指標として県内農家の分娩間隔の短縮および成績向上を図る。

## 2. 一人での牛体内採卵の実施に向けた取り組みについて

(畜産試験場大家畜部 副主査研究員 片山晃志)

牛の体内受精卵の採取(以下採卵)について、一人での採卵実施による作業全体の効率化をはかるために、採卵技術に関する情報収集と当場の採卵における活用を検討した。その結果、得られたノウハウにより採卵の作業時間が短縮され、作業の効率化がはかられた。今後、得られたノウハウについて検討を続け、一人での採卵の実施につなげていく予定である。

## 3. 豚舎における衛生レベル向上に向けた取組

(畜産試験場生産環境部 主査研究員 宮本泰成)

新しい消毒技術であるマイクロMIX法は、有機物存在下でも当場の従来法より消毒効果が認められた。ネズミ対策ではセンサーカメラによる行動調査と殺鼠剤や粘着トラップ等による対策を実施したところ、殺鼠剤を持ち帰るのが確認でき、また粘着トラップ等による対策で飼料の食害を防除できた。

## 4. 暑さに負けない養鶏経営

(畜産試験場養鶏研究所 主任研究員 山田陽子)

養鶏経営における暑熱対策技術として、環境資材、飼料添加物それぞれの単独の効果を調査した。高齢群では環境資材は屋根への石灰乳塗布および屋内ミストの設置、飼料添加物は、梅抽出物(BioX70)+重曹に費用対効果が認められたが、若齢群では対照区との有意差は認められなかった。